おぎん

芥川龍之介

元和(げんな)か、寛永(かんえい)か、とにかく遠い昔である。
天主(てんしゅ)のおん教を奉ずるものは、その頃でももう見つかり次第、火炙(ひあぶ)りや磔(はりつけ)に遇(あ)わされていた。しかし迫害が烈しいだけに、「万事にかない給うおん主(あるじ)」も、その頃は一層この国の宗徒(しゅうと)に、あらたかな御加護(おんかご)を加えられたらしい。長崎(ながさき)あたりの村々には、時々日の暮の光と一しょに、天使や聖徒の見舞う事があった。現にあのさん・じょあん・ばちすたさえ、一度などは浦上(うらかみ)の宗徒(しゅうと)みげる弥兵衛(やへえ)の水車小屋に、姿を現したと伝えられている。と同時に悪魔もまた宗徒の精進(しょうじん)を妨(さまた)げるため、あるいは見慣れぬ黒人(こくじん)となり、あるいは

舶来の草花となり、あるいは網代の乗物となり、しばしば同じ村々に出没した。夜昼さえ分たぬ土の牢に、みげる弥兵衛を苦しめた鼠も、実は悪魔の変化だったそうである。弥兵衛は元和八年の秋、十一人の宗徒と火炙りになった。——その元和か、寛永か、とにかく遠い昔である。

やはり浦上の山里村に、おぎんと云う童女が住んでいた。おぎんの父母は大阪から、はるばる長崎へ流浪して来た。が、何もし出さない内に、おぎん一人を残したまま、二人とも故人になってしまった。勿論彼等他国ものは、天主のおん教を知るはずはない。彼等の

信じたのは仏教である。禅（ぜん）か、法華（ほっけ）か、それともまた浄土（じょうど）か、何（なに）にもせよ釈迦（しゃか）の教である。ある仏蘭西（フランス）のジェスウイットによれば、天性奸智（かんち）に富んだ釈迦は、支那（シナ）各地を遊歴しながら、阿弥陀（あみだ）と称する仏の道を説いた。その後（ご）また日本の国へも、やはり同じ道を教（おしえ）に来た。釈迦（しゃか）の説いた教によれば、我々人間の霊魂（アニマ）は、その罪の軽重（けいちょう）深浅に従い、あるいは小鳥となり、あるいは牛となり、あるいはまた樹木となるそうである。のみならず釈迦は生まれる時、彼の母を殺したと云う。釈迦の教の荒誕（こうたん）なのは勿論、釈迦の大悪（だいあく）もまた明白である。（ジアン・クラッセ）しかしおぎんの母親は、前

にもちょいと書いた通り、そう云う真実を知るはずはない。彼等は息を引きとった後も、釈迦の教を信じている。寂しい墓原の松のかげに、末は「いんへるの」に堕ちるのも知らず、はかない極楽を夢見ている。

　しかしおぎんは幸いにも、両親の無知に染まっていない。これは山里村居つきの農夫、憐みの深いじょあん孫七は、とうにこの童女の額へ、ばぷちずものおん水を注いだ上、まりやと云う名を与えていた。おぎんは釈迦が生まれた時、天と地とを指しながら、「天上天下唯我独尊」と獅子吼した事などは信じていない。その代りに、「深く御柔軟、深く御哀憐、勝れて

甘くましまず童女さんた・まりあ様」が、自然と身ごもった事を信じている。「十字架に懸り死し給い、石の御棺に納められ給い、」大地の底に埋められたぜすすが、三日の後よみ返った事を信じている。御糺明の喇叭さえ響き渡れば、「おん主、大いなる御威光、大いなる御威勢を以て天下り給い、土埃になりたる人々の色身を、もとの霊魂に併せてよみ返し給い、善人は天上の快楽を受け、また悪人は天狗と共に、地獄に堕ち」る事を信じている。殊に「御言葉の御聖徳により、ぱんと酒の色形は変らずといえども、その正体はおん主の御血肉となり変る」尊いさがらめんとを信じ

ている。おぎんの心は両親のように、熱風に吹かれた沙漠（さばく）ではない。素朴（そぼく）な野薔薇（のばら）の花を交（まじ）えた、実りの豊かな麦畠である。おぎんは両親を失った後、じょあん孫七の養女になった。孫七の妻、じょあんなおすみも、やはり心の優しい人である。おぎんはこの夫婦と一しょに、牛を追ったり麦を刈ったり、幸福にその日を送っていた。勿論そう云う暮しの中にも、村人の目に立たない限りは、断食や祈禱（きとう）も怠った事はない。おぎんは井戸端（いどばた）の無花果（いちじく）のかげに、大きい三日月（みかづき）を仰ぎながら、しばしば熱心に祈禱を凝（こ）らした。この垂れ髪の童女の祈禱は、こう云う簡単なものなのである。

「憐みのおん母、おん身におん礼をなし奉る。流人となれるえわの子供、おん身に叫びをなし奉る。あわれこの涙の谷に、柔軟のおん眼をめぐらさせ給え。あんめい。」

するとある年のなたら（降誕祭）の夜、悪魔は何人かの役人と一しょに、突然孫七の家へはいって来た。孫七の家には大きな囲炉裡に「お伽の焚き物」の火が燃えさかっている。それから煤びた壁の上にも、今夜だけは十字架が祭ってある。最後に後ろの牛小屋へ行けば、ぜすす様の産湯のために、飼桶に水が湛えられている。役人は互に頷き合いながら、孫七夫婦に縄

をかけた。おぎんも同時に括り上げられた。しかし彼等は三人とも、全然悪びれる気色はなかった。霊魂の助かりのためならば、いかなる責苦も覚悟である。おん主は必ず我等のために、御加護を賜わるのに違いない。第一なたらの夜に捕われたと云うのは、天寵の厚い証拠ではないか？　彼等は皆云い合せたように、こう確信していたのである。役人は彼等を縛めた後、代官の屋敷へ引き立てて行った。が、彼等はその途中も、暗夜の風に吹かれながら、御降誕の祈禱を誦しつづけた。

「べれんの国にお生まれなされたおん若君様、今はい

ずこにましますか？　おん讃め尊め給え。」

悪魔は彼等の捕われたのを見ると、手を拍って喜び笑った。しかし彼等のけなげなさまには、少からず腹を立てたらしい。悪魔は一人になった後、忌々しそうに唾をするが早いか、たちまち大きい石臼になった。そうしてごろごろ転がりながら闇の中に消え失せてしまった。

じょあん孫七、じょあんなおすみ、まりやおぎんの三人は、土の牢に投げこまれた上、天主のおん教を捨てるように、いろいろの責苦に遇わされた。しかし水責や火責に遇っても、彼等の決心は動かなかった。

たとい皮肉は爛(ただ)れるにしても、はらいそ（天国(てんごく)）の門へはいるのは、もう一息の辛抱(しんぼう)である。いや、天主の大恩を思えば、この暗い土の牢さえ、そのまま「はらいそ」の荘厳と変りはない。のみならず尊い天使や聖徒は、夢ともうつつともつかない中に、しばしば彼等を慰めに来た。殊にそういう幸福は、一番おぎんに恵まれたらしい。おぎんはさん・じょあん・ばちすたが、大きい両手のひらに、蝗(いなご)を沢山掬(すく)い上げながら、食えと云う所を見た事がある。また大天使がぶりえるが、白い翼を畳んだまま、美しい金色(こんじき)の杯(さかずき)に、水をくれる所を見た事もある。

代官は天主のおん教は勿論、釈迦の教も知らなかったから、なぜ彼等が剛情を張るのかさっぱり理解が出来なかった。時には三人が三人とも、気違いではないかと思う事もあった。しかし気違いでもない事がわかると、今度は大蛇とか一角獣とか、とにかく人倫には縁のない動物のような気がし出した。そう云う動物を生かして置いては、今日の法律に違うばかりか、一国の安危にも関る訣である。そこで代官は一月ばかり、土の牢に彼等を入れて置いた後、とうとう三人とも焼き殺す事にした。（実を云えばこの代官も、世間一般の人々のように、一国の安危に関るかどうか、そ

んな事はほとんど考えなかった。これは第一に法律があり、第二に人民の道徳があり、わざわざ考えて見ないでも、格別不自由はしなかったからである。）

じょあん孫七を始め三人の宗徒は、村はずれの刑場へ引かれる途中も、恐れる気色は見えなかった。刑場はちょうど墓原に隣った、石ころの多い空き地である。彼等はそこへ到着すると、一々罪状を読み聞かされた後、太い角柱に括りつけられた。それから右にじょあんなおすみ、中央にじょあん孫七、左にまりやおぎんと云う順に、刑場のまん中へ押し立てられた。おすみは連日の責苦のため、急に年をとったように見

える。孫七も髭(ひげ)の伸びた頬(ほお)には、ほとんど血の気(け)が通(かよ)っていない。おぎんも――おぎんは二人に比(くら)べると、まだしもふだんと変らなかった。が、彼等は三人とも、堆(うずたか)い薪(たきぎ)を踏(ふ)まえたまま、同じように静かな顔をしている。

　刑場のまわりにはずっと前から、大勢(おおぜい)の見物が取り巻いている。そのまた見物の向うの空には、墓原の松が五六本、天蓋(てんがい)のように枝を張っている。

　一切(いっさい)の準備の終った時、役人の一人は物々(ものもの)しげに、三人の前へ進みよると、天主のおん教を捨てるか捨てぬか、しばらく猶予(ゆうよ)を与えるから、もう一度よく考え

て見ろ、もしおん教を捨てると云えば、直にも縄目は赦してやると云った。しかし彼等は答えない。皆遠い空を見守ったまま、口もとには微笑さえ湛えている。

役人は勿論見物すら、この数分の間くらいひっそりとなったためしはない。無数の眼はじっと瞬きもせず、三人の顔に注がれている。が、これは傷しさの余り、誰も息を呑んだのではない。見物はたいてい火のかかるのを、今か今かと待っていたのである。役人はまた処刑の手間どるのに、すっかり退屈し切っていたから、話をする勇気も出なかったのである。

すると突然一同の耳は、はっきりと意外な言葉を捉

えた。

「わたしはおん教を捨てる事に致しました。」

声の主はおぎんである。見物は一度に騒ぎ立った。が、一度どよめいた後、たちまちまた静かになってしまった。それは孫七が悲しそうに、おぎんの方を振り向きながら、力のない声を出したからである。

「おぎん！　お前は悪魔にたぶらかされたのか？　もう一辛抱しさえすれば、おん主の御顔も拝めるのだぞ。」

その言葉が終らない内に、おすみも遥かにおぎんの方へ、一生懸命な声をかけた。

「おぎん！　おぎん！　お前には悪魔がついたのだよ。祈っておくれ。祈っておくれ。」

しかしおぎんは返事をしない。ただ眼は大勢（おおぜい）の見物の向うの、天蓋（てんがい）のように枝を張った、墓原（はかはら）の松を眺めている。その内にもう役人の一人は、おぎんの縄目を赦（ゆる）すように命じた。

じょあん孫七はそれを見るなり、あきらめたように眼をつぶった。

「万事にかない給うおん主（あるじ）、おん計（はか）らいに任せ奉る。」

やっと縄を離れたおぎんは、茫然（ぼうぜん）としばらく佇（たたず）んでいた。が、孫七やおすみを見ると、急にその前へ

跪(ひざまず)きながら、何も云わずに涙を流した。孫七はやはり眼を閉じている。おすみも顔をそむけたまま、おぎんの方は見ようともしない。

「お父様(とうさま)、お母様(かあさま)、どうか勘忍(かんにん)して下さいまし。」

おぎんはやっと口を開いた。

「わたしはおん教を捨てました。その訣(わけ)はふと向うに見える、天蓋のような松の梢(こずえ)に、気のついたせいでございます。あの墓原の松のかげに、眠っていらっしゃる御両親は、天主のおん教も御存知なし、きっと今頃はいんへるのに、お堕(お)ちになっていらっしゃいましょう。それを今わたし一人、はらいその門にはいったの

では、どうしても申し訣(わけ)がありません。わたしはやはり地獄(じごく)の底へ、御両親の跡(あと)を追って参りましょう。どうかお父様やお母様は、ぜすす様やまりや様の御側(おそば)へお出でなすって下さいまし。その代りおん教を捨てた上は、わたしも生きては居られません。……」

おぎんは切れ切れにそう云ってから、後(あと)は啜(すす)り泣きに沈んでしまった。すると今度はじょあんなおすみも、足に踏んだ薪(たきぎ)の上へ、ほろほろ涙を落し出した。これからはらいそへはいろうとするのに、用もない歎(なげ)きに耽(ふけ)っているのは、勿論宗徒(しゅうと)のすべき事ではない。じょあん孫七は、苦々(にがにが)しそうに隣の妻を振り返りなが

ら、癇高（かんだか）い声に叱りつけた。
「お前も悪魔に見入られたのか？　天主のおん教を捨てたければ、勝手にお前だけ捨てるが好（い）い。おれは一人でも焼け死んで見せるぞ。」
「いえ、わたしもお供（とも）を致します。けれどもそれは――
――それは」
おすみは涙を呑みこんでから、半ば叫ぶように言葉を投げた。
「けれどもそれははらいそへ参りたいからではございません。ただあなたの、――あなたのお供を致すのでございます。」

孫七は長い間（あいだ）黙っていた。しかしその顔は蒼（あお）ざめたり、また血の色を漲（みなぎ）らせたりした。と同時に汗の玉も、つぶつぶ顔にたまり出した。孫七は今心の眼に、彼の霊魂（アニマ）を見ているのである。彼の霊魂（アニマ）を奪い合う天使と悪魔とを見ているのである。もしその時足もとのおぎんが泣き伏した顔を挙げずにいたら、――いや、もうおぎんは顔を挙げた。しかも涙に溢（あふ）れた眼には、不思議な光を宿しながら、じっと彼を見守っている。この眼の奥に閃（ひらめ）いているのは、無邪気な童女の心ばかりではない。「流人（るにん）となれるえわの子供」、あらゆる人間の心である。

「お父様！　いんへるのへ参りましょう。お母様も、わたしも、あちらのお父様やお母様も、――みんな悪魔にさらわれましょう。」

　孫七はとうとう堕落した。

　この話は我国に多かった奉教人の受難の中でも、最も恥ずべき躓きとして、後代に伝えられた物語である。何でも彼等が三人ながら、おん教を捨てるとなった時には、天主の何たるかをわきまえない見物の老若男女さえも、ことごとく彼等を憎んだと云う。これは折角の火炙りも何も、見そこなった遺恨だったかも知れない。さらにまた伝うる所によれば、悪魔は

その時大歓喜のあまり、大きい書物に化(ば)けながら、夜中(よじゅう)刑場に飛んでいたと云う。これもそう無性(むしょう)に喜ぶほど、悪魔の成功だったかどうか、作者は甚だ懐疑的である。

（大正十一年八月）

底本：「芥川龍之介全集５」ちくま文庫、筑摩書房
１９８７（昭和62）年２月24日第１刷発行
１９９５（平成７）年４月10日第６刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
１９７１（昭和46）年３月〜１９７１（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９９年１月５日公開
２００４年３月９日修正

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。